『平家物語』の生成

――「抜書」ということ――

山下宏明

一

『平家物語』には異本が多い。しかもそれら諸本がきわめて多様である。特に成立年代から言って南北朝期以前と見られる、いわゆる非当道系[1]の諸本の間に異同が大きい。それに比べて当道系諸本は、一方流と八坂流の両流派、更にはその各系統の下位分類に属する複数の分類が可能ではあるにしても[2]、非当道系の諸本に比べるならば、その異同は必ずしも決定的とは言えない。このような諸本本文のあり方から、『平家物語』諸本の流動は、鎌倉期から南北朝期までの間に顕著に見られ、南北朝期以後は、むしろ固定期を迎えるに至ったとするのが、これまでのおおかたの見通しであった。

にもかかわらず、『平家物語』の諸本を離れて、物語をとりまく能や幸若舞曲などの芸能、室町時代の物語、更には各地に伝わる、たとえば『八島軍』のような在地の語り物など、いずれも南北朝期以後の作品には、意外に南北朝期以前の成立と思われる非当道系諸本との関係が想定されたり[3]、現存諸本のいずれにもその典拠を特定しがたいものの多く見られることが注目される。

このような南北朝期以後の『平家物語』の生成とかかわりのあるものに抜書がある。ただしその抜書も多様で、大きく分けると、

(A) 何らかの事情による、文字通り物語の抜書にとどまるもの

と、

(B) 単なる抜書の域を越えて、物語の再構成を行っているもの

とに分かれる。

以下、まず(A)の単なる抜書から見ると、

(一) 平曲の伝承上、秘曲とされるものを抜書したものがある。

彰考館や内閣文庫に『平家奥秘』が伝わる。『平家勘文』(『平家勘文録』)『平家宗論』『壇浦合戦記』と合綴になるもので、高橋貞一氏[4]によれば、彰考館本が親本で、内閣文庫本は、その転写本である。その中の『平家奥秘』には、「延喜聖代」「劔沙汰」「鏡沙汰」「願文」「堂供養」の五句をおさめ、いずれもその内容から見て、平曲において秘曲として別扱いされていたものである。一方流本もしくは八坂流第四類の如白本に近い本文を伝えるが、ただ「延喜聖代」のみは、覚一本などが巻五の「朝敵揃」の次に置く話と異同がある。すなわちその内容

は、醍醐天皇の人となり、その経歴とその治政のすぐれたことを語り、五位鷺の話に及ぶ。更に寒い夜には民の身の上を案じて衣を脱がれたこと、同じく民を思うあまり民間を視察したことを語る。物語は、もともと、朝敵の永く栄えることのないことを語るために天皇の聖代を顕賞するものであるが、この「延喜聖代」では、むしろ醍醐天皇の讃歌を以て完結していると見るべきであろう。平曲の語りにおいても、このように本来の挿入説話としてのあり方から、独立した一編の物語として完結する志向の見られたことを見るべきであろう。ちなみにこの完結した醍醐天皇物語は、高橋貞一氏によれば妙覚寺本にも見られるもので、それは『平家物語』などから補ったものと言う。

なお同じく彰考館・内閣文庫には、単行の『平家宗論』が伝わるが、その内容は、一方流の覚一本系の竜門文庫本や田安本のそれと変らない。

ともあれ「延喜聖代」を除く四句は、平曲伝承上の秘曲を抜き出して集めたものである。

島原公民館の松平文庫に『平家物語秘伝書』が蔵される。冒頭の目録に

一、三拾三間供養之事　一巻
一、宗論之事　十巻
一、鏡劔(ママ)之巻事　十一巻
一、備前守行家被誅之事　十二巻
一、盛久之事　十二巻

と記す。

「三拾三間供養之事」は、いわゆる得長寿院供養の事であり、それは当道系では八坂流第四類の如白本に見えるものと本文が一致する。ただし如白本には異説をも併せ有するが、本書にはこの異説が見えない。ちなみに、この得長寿院供養の事は、非当道系の延慶本などに源を発するもので、これを当道系がとり入れるに際して、その内容から秘曲扱いしたものらしい。『看聞御記』の永享四年十月二十八日の条に、

城竹検校両三年不参之処、目珍参。遠江在国、此秋上洛之由申、平家語、得長寿院供養事、平家之秘事也、仍無左右不語

とあることからも明らかである。

「宗論之事」は、如白本の本文にほぼ一致する。この句は一方流において秘曲として本文から抜き出す動きが室町期から見られるもので、例えば『蔗軒日録』文明十七年三月十三日の条に

所謂宗論嘗者秘密、為予語之

と見え、事実、江戸期にはこれを次の「鏡・劔之事」ともども、三曲の奥秘に数えている。

「鏡・劔之事」の本文は、如白本に一致する。ただし如白本には、途中に「秘事タル故音曲ニモ不語」の一文が挿入されるが、本書にはこの記述が見えない。しかしその直後には如白本がミセケチしている「私云此点加ル分取ヲ為二秘事一之間音曲ニモ不レ歌也本ニハ裏ニ書レ之ヲ也」を見せている。

「備前守行家被誅之事」は、八坂流第一類本の中のB種本に近い。

目録には落ちているが「法性寺合戦之事」がある。これは平家の公達、知忠・忠房・宗実・越中二郎の後日談を語るもので、その本文は、八坂流第一類のB種本もしくはそれに第二類本を加筆したものである。

「盛久之事」は、盛久が処刑される直前、清水観音の利生により、助命されたことを語る話であるが、当道系諸本には見えず、非当道系の長門本に同様の話が見える。ただしその本文は一致しない。

この行家らに関する三句は、一方流において、平家一門の滅亡後の話を平家の嫡孫六代に限定して行く方向を見せることから、これらを切り出して行った。内容的に秘曲とすべきものではないが、一方流におけるこのような傾向から、八坂流もしくは非当道系の本にこれを求めて『秘書』に加えたものと思われる。いずれも当道系において本文の固定化が進む過程での所産と言うべきであろう。

二

(二) 物語の梗概を記したもの。

斯道文庫に、江戸初期の写しになる『平家物語抜書』が蔵される。ほぼ物語の順序に従って、物語の梗概を記したもので、例えば、

一、仁平元年正月十五日忠盛五十八歳ニテ卒去ス清盛嫡男タルニヨツテ跡ヲ続ク云々

のように個条書きで、しかも必ずしも物語の内容を十分にはとらえきらない形で略記したものである。中には、

大塔建立　頼豪略之

などに見るように、省略を行っている場合がある。末尾を「六代被斬」で終っていて、建礼門院の後日談には全くふれていないので、八坂流本との関係も想定できなくはないが、上述のような省略のあり方から見て、必ずしも八坂流を典処本とは限定しがたい。いずれにしても、非当道系よりは固定した当道系の本文を、省略をも行いつつ、梗概化し個条書きにしたもので、物語の生成論上の意義は見出しがたい。

同じく松平文庫に『盛衰記抜書』を蔵する。江戸初期の写しである。巻頭に

盛衰記　四十八巻　三百八十八ケ条

と題し、

一、清盛　桓武天皇第五皇子一品式部卿葛原親王九代後胤讃岐守正盛孫刑部卿忠盛ノ嫡男也

に始まり

一、重衡ノ御子モ蓮台野ニテ□リケル母ハ桜町中納言ノ姫中納言ノツホネト申也御子キラレタマイテ後出家子ノ首ト小車トヲモチテ南都ヘ参□ヤケアトヲ拝シソレヨリ天王寺ヘ参□断食シテ□沖ニ身ヲナゲムナシク成タマフ也

で結んでいる。この最後の話は、『盛衰記』巻四十七の「髑髏御前の事」の要約である。中には、

一、梶原平三ハ大場カイトコ也

のように、全くメモにとどまる項もあり、『盛衰記』の順序に従い、個

条書きに事実の注記や説話の要約を記したものである。中には、例えば、巻一「清水詣の事」を『抜書』は

一、清盛清水ノ観音ニ千日詣ヲシ満ケル夜ハ通夜シケリ其夜ノ夢ニ両眼抜出テ失ヌトミル此事高札ニカキテタテラレタレハ目出度ト人申也

と要約しているが、『盛衰記』の当該説話の末尾は、

清盛大きに悦びて、さては好相なりけりとて、彼の札を深く納めて天を仰ぎて果報を俟つ

とあり、『抜書』は、底本と微妙なずれを見せている。どのような方針を以て三百八十八か条を選んだのかも明らかではないけれども、要するに本書は『盛衰記』の覚え書にとどまり、『平家物語』の流伝、伝承にかかわるものではない。

三

㈢ 単なる抜書

筑波大学中央図書館に『八坂流平家物語十二巻之末』一冊が蔵される。「備前守行家被討事」「右大将上洛之事」の二句を抜き書きするが、その本文は、八坂流第一類のB種本文に一致する。末尾に「文政八年乙酉春正月以検校保己一本写　岡正武」とある。岡正武には、この外、大阪の星野検校から口授された『八坂流平家物語訪月之巻』一冊がある。この『訪月之巻』は、文政三年の写しで、八坂流第二類本の本文を伝えるものであるが、これら両書が存在することから、幕府大番役で国学者であった正武が、一方流前田流の星野検校から八坂流を授かり、その八坂流の古本である一本を和学講談所の保己一に借覧して写したものと見られる。八坂流本文の伝授を知る手がかりにはなるけれども、本文の生成史上、もしくは享受史上にも積極的な意味は見出しがたい。

島原公民館の松平文庫に『源平盛衰記抄』が蔵される。江戸初期の写しで、全巻二十か条の抜書である。冒頭の

文覚高雄勧進付仙洞管絃事

が『盛衰記』の巻十八におさまるものであることを例外として、以下、巻十から二段、巻二十五（順序ママ）から二段、巻二十から一段、巻三十一から二段、巻三十二から二段、巻三十三から一段、巻三十六から一段、巻三十九から一段、巻四十から二段、巻四十一から一段、巻四十二から二段、巻四十三から一段、巻四十四から一段を抜き出したものである。これらの中には、例えば、

時頼横笛事（巻三十九末）
法輪寺付中将相見瀧口幷高野山事（巻四十始め）

のように、巻をわたって関連説話を続けて採っているものがある。ただしこれら二十か条の抜書に、いかなる意味があるかは明らかでない。いずれにしても抜書以上のものではない。

四

㈣ 古筆切

藤井隆氏の紹介になる数種の古筆切が伝存する。その底本となった本文は、『源平盛衰記』の祖本的なものの外、八坂流第一類などがあるが、この点については、上述の㈢の抜書とも重なる。ただこれら古筆切は、藤井氏が指摘されるように、名物切の一種、手鑑として利用されるに至るのであるが、その切れとして仕立てられる以前の形態がいかなるものであったかは、断簡であるがゆえに必ずしも明らかでない。ただ『平家物語』諸本の中に、主として室町末期から江戸初期にかけて写されたもので、末尾に古筆の極めの付されるものがある。その極めの真偽については疑問があるにしても、貴族や僧侶などの間で、写本としての形態に美的な意味を見出そうとしたもので、それが時に名物切として仕立てられることもあったであろう。なお、笠栄治氏により延慶本に近い本文の断簡が紹介されているが、これも偶然、物語の一部が残ったものである。いずれにしても、この場合も、『平家物語』の本文としては、上述した抜書と変らない。

五

㈤　上述の抜書とかなり性格を異にするものに、一種の注釈を抜書の形にしたものがある。島原公民館、松平文庫の『平家打聞』である。全体を十二段に分かち、それぞれ「平家打聞第六巻」のように記す。高橋貞一氏が言われるように、十二巻本の『平家物語』について、掲出の事項に関する解説乃至は注釈を行った書である。例えばその巻五「走湯権現」の注として

示現、今至元亨四年甲子帝王四十余代年序及四百五十二年

などとあることから、元亨四年以後、あまり降らぬ頃の成立と思われるが、高橋氏は、四部合戦状本の灌頂巻の冒頭に「附第十二巻裏書」とあることに注目され、『打聞』の冒頭、「漢王莽」の注に

漢王莽者如裏書

とあること、その形態が真字本で文体も四部本に似ていること、この『打聞』の注解無くしては四部本が理解し難いことから、この『打聞』が四部本の言う「裏書」であろうとされる。四部本との関係については、別にふれる高橋伸幸氏の『平家族伝抄』の裏書だとする説もあり、それに高橋貞一氏の言われる説についても、なお再考の余地があると思われるので、今後の課題としたい。ともあれ十二巻形態の『平家物語』を底本とする、それも巻七相当部分を「昴日」の注解で始めることから、その巻七に養和二年二月の昴星の出現を記す本（現存本では四部本と延慶本がこの構造を伝える）であること、巻十二相当部分を「法勝寺」の注で始めるので、その依拠本は巻十二を法勝寺の崩壊を記す「大地震」で始める（現存本で法勝寺の倒壊を描くのは四部本である）、つまり『平家物語』諸本の中では古本に属するものであることは確かである。

その内容は、物語に見える語句を、物語の読みに役立てるべく注釈を施すと言うよりは、むしろとりあげた事項について、物語とは無関係に長々と記述するものである。例えば、巻二の相当部分に、おそらく「蘇武」に関する注解と思われるが、当該説話に登場する李広をめ

ぐって、漢王に三千人の后があり、胡王にその中の一人の美女を乞われる。漢王は絵師に三千人の后の似世絵を描かせる。他の后たちが絵師に賄賂を贈ったが、王昭君一人がこれを贈らなかったためかの女が悪女に描かれる。その結果、王昭君が胡王に遣されることになる。この王昭君を素材とする五首の和歌を掲げ、更に漢王が王昭君の返還を胡王に要請するが拒まれたため、漢王は兵を遣しこれを攻める。結果的に永律が胡を破り、王昭君を漢宮へ返したとする。この王昭君の話は、『俊頼髄脳』や延慶本（四部本は欠巻）などに見られる。本書『打聞』の出典を確定しがたいけれども、いずれにしても、この『打聞』の話は、

十九年経者李広ヵ妻云ヵ迦仙人以檜造我夫形（ママ）……

として、蘇武が十九年目にして捕らわれの身から赦されて帰国するに至った事実を注解しようとしながら、実際には蘇武その人については ほとんど言及しない。むしろ王昭君の不幸と、その永律により救出されることを主に記していると言える。このように『平家物語』の異本や異伝とは全く異なる、百科全書的とも言うべき注釈の書である。『古今集』や『日本書紀』をめぐって、注釈書の存在することが片桐洋一氏や伊藤正義氏らにより紹介されている。これらが軍記物語などの成り立ちに一つの文学史的な土壌を提供していることが言われるが、本書もそれに類する一書と見ることができるであろう。その成立年代の推定とともにその個々の注解の出典の探索が今後の課題となろうが、『平家物語』の生成に直接かかわりを示すものではない。

六

抜書として、生成論上、問題になるのは、単なる抜書の域を越えて、

(B) 物語の固定する以前の形、もしくは一たん物語が完成して以後の物語の再構成を行ったものである。その中、

(ハ) 物語が固定する以前の、物語が増補されて行く過程で、別書とされたものがある。すなわち、当道系諸本の中、もっとも古態を伝えると思われる屋代本の、別冊とする「平家抽書七箇条」である。本書については、春田宣氏に詳論[10]があるが、その七か条の中、第六条の「新院厳島御同（ママ）御願文事」および第七条の「将門序」については、他の条々と異なり、目次の配列が他の五か条と異なること、その本文の属すべき巻数の明示が無いこと、第六条については、本文中、維盛らの東国出兵を語り出す所に「伊土岐島御幸事同願文之事　有ヘシ」とその位置を明記していること、第七条については、その本文の巻五と一部重複する個所があるので、春田氏が言われるように屋代本として書写される（他の巻と字体は同じ）段階で、成立の上では複雑な過程を示した説話を寄せ集めたものと想像される。

問題は、これらの七か条が、なぜ抽書とされたかである。その各条の話の内容を検討してみると、

第一条の「義王義女仏閑事同出家事」は、覚一本の話と内容上、大異が無い。ただ春田氏も言われる通り、例えば清盛が仏御前に心を移すくだりは、非当道系の諸本の話に比べれば、その露骨さが柔らげられているとは言いながら、なお覚一本に一層の美化が見られる。ともあ

れ、この物語の主人公は義王であって、清盛は脇役にとどまり、清盛を主人公とする物語の前後からは遊離を見せている。

第二条の「入道相国為慈恵大僧正化身事」は、巻六におさめるべきものとし、清盛の死去に関して、その生まれの異常性を語るために慈恵の再誕とするもので、内容上、覚一本と質的な違いはない。この成立について屋代本の類の本文と覚一本の本文とがかかわるものと思われる平松家本[11]が、目次の上で、これを別紙に有りとしている。

第三条の「流沙葱嶺事 同宗論事 并高野御幸事」は、本文では、清盛の死後、かれが白河院の御子であった事を語った後に置くべきものである。寛治二年のこと、白河院の仙洞御所に集った人々が天竺での如来の説法を聴聞しようと言ったのに対し、大江匡房が、その途中に横たわる流沙葱嶺が嶮難であることを言い、本朝の高野山の生身の大師を拝することで十分とし、併せて真言で説く即身成仏義が他の教えに比べて秀でているとする宗論を語る。特にこの『抽書』では、この匡房の説に感銘した院が始めて高野への御幸をとげたことを語って後、

白河院加様ニ高野ヲ執シ思召シタリシカハ、其御子ニテ清盛モ高野ノ大塔ヲ修理セラレケルニヤ不思議也シ事共ナリ

と結ぶ。清盛が高野の大塔を修理したことは巻三に見えるところで、この説話は、清盛には直接の関係が無く、むしろ高野真言宣揚のための独立した説話である。ただ清盛を白河院の落胤としたこと、この清盛が巻三においてこの高野の大塔を修営していたことから、この巻六に位置付けようとしたものと思われる。いずれにしても、巻六の本文としては安定性に欠ける。現に覚一本の一本である竜門文庫は、これを巻十の維盛の高野参詣に関係づけるためであろう、巻十の巻末に移し、葉子十行本は巻十の「高野巻」の中にとり込んでいる。平松家本は、巻六の目録に

一、流砂葱嶺之事在二別紙一

として、『抽書』と同じ扱いを示している。

第四条の「皇后宮亮経正竹生島参詣事」は、平家の北国討伐の途中、経正が竹生島に詣でその神助のあるべき奇瑞を見たことを語るものであるが、物語の構想に従えば、この後、平家は敗戦の憂き目を見るのであるから、この話は物語として落ち着きが悪い。平松家本も巻七目録に、別紙にありとしているが、元々物語とは、別次元で成立していたものを、本文中にとり込もうとしたものであろう。

第五条の「本三位中将重衡狩野介預事付千手前事」は、巻十（巻十一と誤る）に置くべきもので、重衡の悲劇をもり立てる話として千手前をからませるものである。

第六条の新院厳島願文は、巻五、平家の関東出陣に先立ち、新院が世の乱れを安からず思って厳島へ御幸のあったことを語るが、その新院の願文そのものの内容は、厳島を讃美し、これに法華経などの自筆経典を奉ることを言うもので、物語の前後の文脈とは必ずしも重ならない。

第七条の「将門序」は、その句名の由来が不明であるが、内容は「延喜聖代」である。しかも本稿第一節にとりあげた『平家奥秘』におさ

める醍醐天皇物語にふくれ上ったものとほとんど一致する。

ともあれ平松家本が、これら七か条の中の第二条・第三条・第四条を抜書にしていたらしいことも、これらが特殊な話であったことを示している。前に述べたように現存の『抽書』の成立には複雑な段階を経ての積み重ねのなされている可能性がある。例えば第七条の「延喜聖代」にはその色彩が濃い。ただこれら抜書の条については、非当道系諸本において欠く諸本があったり、当道系諸本において位置を異にするものがあり、物語としてその前後からの遊離、言いかえれば『平家物語』とは内容的に異質性を思わせる所が大きい。屋代本がこれを抽書としたのは、その多くは現存の屋代本が写される段階で、もともと当道系の物語としては採用されていなかったものを本文にとり入れようとしながら、まだその前後への融合を十分に果し了えていないことを示すものであろう。「延喜聖代」については、なお検討を要するが、その多くのものは室町期の『平家族伝抄』などに比べる場合、『平家物語』の世界からの逸脱の色は稀薄で、おそらく鎌倉期の成立になるものと見られる。それが南北朝期の覚一本に至って本文にとり込まることになるのである。

『平家物語』の成立後、この物語に関連させる形で種々の語り物や物語が成立したであろう。例えば成立の時期、『平家』諸本との関係については、まだ確定を見るに至っていないが、[12]『平家物語』とかかわりながら高野真言の宣揚につとめる唱導性の濃い一編の物語とした『平家秘巻　高野巻』（後述）がある。

七

1

(七) 物語を拡大再構成したもの。

その中の特に注目すべきものとして、高橋伸幸氏[13]により発見された彰考館蔵『刀後聞』（冒頭部分が散佚し「忠盛昇殿事」の末尾の本文「刀ニ後聞〈」から始まるため、この名称が付されたもの）と『平家族伝抄』がある。高橋氏の紹介を踏まえ、松本隆信氏[14]は、両書が全く重なり、いずれも不完本であるが、いずれかと言えば『刀後聞』の方が古い形を伝えるかとし、記事内容は室町時代の色が濃いとされる。この『刀後聞』には欠けるところであるが、『族伝抄』の下巻、「十一巻分神璽宝劔内侍所事」のはじめに「抑内侍所宝劔由来如ニ本書一申ニ神璽一云々」とあることから、『平家物語』を前提とするもので、その原典とは四部合戦状本である可能性があるとされる。

この原典を四部本とする推定については、高橋氏[15]の説を引かれるもので、

(1) ヲコト点など訓点が見られるが、それらが四部本のそれと一致すること。

(2) 四部本に欠ける部分を補うものが『族伝抄』の話であること。

(3) 『族伝抄』の「祇王」は、『宝物集』の「人間道」から採ったもので、四部本の灌頂巻がやはり『宝物集』によっていること。

(4) 四部本の灌頂巻の冒頭に

平家灌頂巻一通　付十二巻裏書

とあり、この「十二巻裏書」を「灌頂巻」とは言えず、灌頂巻の後に添付されていたものがあると考えるべきで、その「裏書」こそ『族伝抄』であろう。

とされるものである。この四か条については、例えば(1)の訓点、用字法については、識者の幅広い展望からの論を待ちたい。(3)の『宝物集』との関係についても、本書のそれが四部本灌頂巻における関係と同質のものと考えられるのかどうかの検討が必要である。(4)については、高橋氏の説にもかかわらず、やはり四部本の「付十二巻裏書」と「灌頂巻一通」とを別のものと見るべきかどうかが問題である。この種の書き方について、なお幅広い調査が必要であるが、管見に入る限りでも、例えば『今昔物語集』が、「巻二十　本朝付仏法」とする。それは、その巻二十が本朝部で、しかもその仏法部であることを示すものと読むべきであろう。「付」の位置に疑問が残るが、四部本の末尾の記述を「平家灌頂巻一通はすなわち十二巻の裏書である」と読むことも全く不可能とは思えない。

『族伝抄』の上巻が、いずれも「一巻分」として「忠盛昇殿事」「入道被仕禿事」「義王義女事」の三か条をおさめ、下巻として「十、六巻分　経島事」「十一、七巻分　黒坂口柳原今八幡宮事」「十二、八巻分　天武天王焼栗事」「十三、九巻分　氷超取事」「十四、十巻分　本三位中将被渡南都事」「十五、十一巻分　神璽宝劔内侍所事」「十六、十一巻分　宗盛卿父子最後事」の七か条をおさめる。まず個条番号の付じ方に、上・下巻の間で違いがあり、下巻の第十か条の前に欠脱があると見るべきところから、高橋氏が言うように欠巻があると見るべきで、上巻と下巻とが別集であるとする松本氏の説にも従うべきであろう。下巻の中の第十四条の重衡の話を十巻分とするのは十一巻分とすべきかも知れないが、この一条を除けば、その出典となった『平家物語』の本文は、延慶本・長門本・源平盛衰記といった広本系[16]の諸本と言うよりは、非当道系でも略本系、もしくは当道系の諸本であったと見てよいようである。

ともあれ、これらの外的な形態についてはなお今後の課題とし、さしあたって、以下その内容を検討する。

まず下巻の十三条、「氷超取事」である。これが『平家物語』巻九の一谷合戦に先立つ義経の軍の鵯越の話にかかわることは言うまでもないが、本書のそれは、物語の本筋である坂落しではなく、その「ひおどり越え」の名の由来を語るものである。熊谷直実・平山・金子らが問答する中で佐々木四郎が語るところで、井上親王に敗れて播磨へ落ちた履仲天皇が干飯を食するための水を求めてある谷底に氷をとる。時に老翁が現れ天皇を導いた。後日、天皇は井上親王を破るのであるが、例の天皇らを導いた老翁が山神の勝男明神で、氷を取ったところから「ひおどり」の名ができたとする。一種の地名由来説話であるが、仁徳天皇の第一皇子の履仲天皇と、聖武天皇の皇女で光仁天皇に対する謀叛を噂された井上内親王とでは時代が合わない。それにこの話は『平家』諸本は勿論、他にも管見に入るものが無い。天皇を導いたという勝男明神は当然、この鵯越の周辺に求めるべきであろうが、それら

しきものが思い当らない。とすれば、この話は、ある受難の主人公が神の導きにより難局を切り抜けたとする民話と、それにまつわる地名解釈の型を踏まえた創作説話の色彩が濃厚である。

第十四条の「本三位中将被渡南都事」は、重衡が伊豆から南都へ送られる過程を語るものであるが、処刑の迫った重衡が、上人に自らの後世菩提を弔ってもらうべく装束と鏡を贈る。鏡は、上人の手により、大仏鋳造に役立てようとするが、重衡の罪業が重いため、うまくとけ合わず捨てられたこと[17]、重衡は処刑された後、上人のとりなしにより、その首が葬られたことを語る。そこには『平家物語』に見るような、北の方との悲しい離別が見られない。その意味で『平家』の話とは別伝かと思われるが、現に『源平盛衰記』では、

已上は南都より出でたり、次の説は世に流布の本なり

として、二話を併せ掲げる。更に話はのせないが、

一説には、重衡をば奈良坂にて首斬るといへり

とある。盛衰記に見る限りでも、三種の話の存在が知られる。たまたまこの『族伝抄』の話が、重衡の処刑された場所を奈良坂としているのは、この『盛衰記』の一説と重なるのかも知れない。ただ大仏鋳造に奉った重衡の鏡がとけ合わなかったとするのは、『平家物語』自体が語る重衡の悪行、南都炎上を発展させるもので、その意味で本書の編者が物語の読みから一つの脚色を加えたと見ることも可能である。むしろ以下述べるような本書の性格から推測するならば、奈良坂で処刑されたとする伝承を踏まえながら、更に脚色を加えたと見るのが穏当であるらしい。

2

本書の冒頭には、「忠盛昇殿事」があるが、その内容は、忠盛が造進した得長寿院供養の事である。その導師に任命された貧僧が、実は延暦寺の薬師であったことを語るものであるが、類話が延慶本・長門本・『盛衰記』・如白本などに見られる。ただ本書の話をそれらの諸本のそれと比べると、例えば導師を選ぶのにくじを用意するとするのが延慶本などであるが本書にはそれが見られず、当初から例の貧僧が任命される。この小異のよって来るところは、その貧僧に対面して、当日の約束をする、つまり貧僧にその任を与えたのが忠盛になっている。それに、当日の供養の儀の日記が温明殿に納められ、

法皇御感余ニ其日則被レ免内ニ昇殿一

とある。つまり忠盛は、得長寿院造進の功徳の上に、更にその供養についても法皇の御感があって内の昇殿が許されたというのである。言いかえれば、貧僧に化身する薬師との間に関係を生じる、つまり薬師が忠盛を助けて供養の盛儀を行わせたということになろう。更にはこの説話の末尾には、この後、殿上人たちのそねみによる忠盛闇討の計画も、

薬師成二僧形一七日先立被三示事由一故被ニ用二意ニ木刀一後聞ヘ

と言う。

延慶本などの当該説話にあっては、得長寿院供養の儀は、その前後の物語、造進による忠盛の昇殿と、これに対する殿上人たちのそねみ、

闇討を語る構想からはそれて、供養をめぐる薬師の霊験そのものを語ることになるのだが、『族伝抄』の場合は、それを前後の忠盛説話に結び付けるために上述したような忠盛の参加と、これに対する薬師の霊験を語り添えたと言えるであろう。この『族伝抄』のあり方を、延慶本などと比べる場合、『族伝抄』は、先行の説話を物語の前後と脈絡を付けるために改作を施し再構成したものと言えるのであろう。

下巻の第十条として「経島事」がある。清盛が生前行った善行の一つとして語る経島の構築に関する話で、これが延慶本などに見られるが、それらでは、結局、一切経を沈めることで竜神をなだめて構築を可能にしたと語るのであるが、『族伝抄』では、この間の経過が複雑である。すなわち橘宗康の娘を人柱に立てようとするのを、十五歳の菊王がその身代りになろうとする。ところがこの菊王を恋慕していた亀王がその菊王の身代りになろうとする。ここで重盛が登場し、両人の仲を感じて両人を結婚させる。その上で重盛は亀王に自らの名の一字を与え重光と改名させ、これを人柱に立てるが、その亀王の書写していた法華経の観音品が浮き上り、そのため改めてこれを石面に写して沈めた。後日、菊王も出家し、亡夫の菩提を弔い、重盛らを感動させたというのである。

この築島の話は有名であったため、幸若舞曲などにも影響を与えることになるのだが、延慶本などでは人柱の代りとして沈められたものが一切経であるのが、『族伝抄』では、この人柱と経沈めとを併せ行ったことになっている。それに菊王と亀王両人の愛情物語を構成して、この両人の仲をとりもつ者として重盛を登場させているのである。『族伝抄』独自の一部改作と見ることができる。

下巻第十六条として「宗盛卿父子最後事」がある。関東へ連行された宗盛父子は、頼朝に会見した後、比企藤四郎義員を介して、帰洛の上、出家せよとの指示を受ける。つまり一たん父子の助命がかなうことになるのである。喜ぶ宗盛を使者の義員が不覚人と非難し（原本、むしくいがあったようで、この間欠落があり、この宗盛を非難する人を義員と決め難いかも知れない）、これを宗盛自らが、猛虎すら一たん捕らわれると人になついて食を求めるものだと弁明する。諸本では、見る人が宗盛を同情してその弁護をするのであるが。それに宗盛の処刑後、副将が父の死を知って死を覚悟することになっている。これも『平家』諸本では、まず副将の死があって後に、宗盛父子の死が語られるものである。更にその宗盛の首が懸けられるのを見て、ある法師が、実は宗盛が清盛の実子でなかったことを明かすことになる。この宗盛の出生に関する話は、『源平盛衰記』巻四十三「二位禅尼入海」に見えるもので、『盛衰記』では、日頃の宗盛の行動を見ていた二位尼が、この後の宗盛の行動をいち早く予見し、それゆえにそのふがいなさを指弾するために二位尼自身が宗盛はわが実子に非ずときめつけることになっている。[18] 宗盛をめぐる都合四種の話を集めるのが『族伝抄』であるが、その宗盛のふがいなさを出生をめぐる秘話に求める姿勢は、はじめの宗盛なりに人々の非難に対してその思いを語らせるあり方とは、必ずしも重ならない。むしろ宗盛を侮蔑することで一貫しているのは

『盛衰記』であり、『族伝抄』は、この『盛衰記』もしくはそれに類する本文を踏まえ、宗盛物語を一貫しない形ながら再構成したものと見るべきであろう。

3

上巻に「入道被レ化レ禿事」がある。いわゆる「かぶろの沙汰」であるが、清盛が一門の栄花に対する世のそねみを封ずるために禿童を放った。その類話を中国に求めるものである。当道系の諸本と異なり、延慶本などでは王莽が策を呼して自ら帝位を奪った経過を語る。『族伝抄』の話も、これらと関係があるものと思われるが、しかも延慶本が、漢帝の時代、『盛衰記』が孝平帝の時代とする点で、本書の梁の武王とは異なる。それに王が国中に賢人を聟に求める。これに王莽が立候補するという形をとること、延慶本などでは王莽の策として銅の馬と人とを造って竹の節を通して入れたとするが、『族伝抄』にはこのプロットが見えない、などの異同がある。しかし何よりも大きな異同として、当道系、非当道系の区別無く、『平家』の場合、この王莽説話を通して語るのは、清盛の武断政治を語るその例証として語ること、もしくは王莽の王位簒奪を非難すべきこととするのにこの説話の意味があるはずであるが、『族伝抄』では、この策を用いた王莽のように、清盛も栄花をきわめることになろうと、むしろその一門の栄花をことほぐ勧学院の学生たちのことばを引き出すことになっている。この点、四部本、延慶本などの諸本や、更には当道系の諸本とも、その志向するところが別であると言うべきで、例えば延慶本に見られるような王莽説話を改作しつつ、しかも清盛ら一門の栄花を予告する例証説話として再構成していると見るべきであろう。

同じく上巻に「義王義女事」がある。『平家』諸本にも見られるものであるが、しかも『族伝抄』の説話は、『平家』諸本の話とかなり違っている。すなわち、まず義王の素性を和泉守致重の娘とし、母とじとともに母子三人が清盛の寵をうるべく六波羅に推参したとする。これは『平家』諸本の、この後に、推参する仏御前の話からそれこそ逆類推して改作したものと見られる。更に仏御前の登場はこみ入っていて、まず前の義王同様に、その父を山田小次郎惟幽と明かし、この父が甥との土地の境界争いから非業の死を遂げる。この亡父の仇を討つために、清盛の助力を仰ぐべく清盛に近付いたとする。事実、この清盛の援助をえて、念願の仇討を果たすことになったとするのであるが、このようになると、例えば覚一本に見られるような、義王その人の仏御前や清盛に対する恨みと、それをいかに剋服して仏の道へ入って行くかの心裡の苦悩[19]とは異質の、むしろ仏御前の仇討ちが物語の表面に浮かび出ることになるだろう。更に無事、出家をとげた四人の動静についても、清盛の亡き後、この清盛の死がかれらの善知識となってからは出家し、清盛の後世菩提を弔うことになったとする。仇討のテーマともども室町的な色あいの濃いところで、『平家』諸本の話に比べると改作の跡が著しい。

下巻第十一条の「黒坂口柳原今八幡宮事」は、義仲が戦勝祈願をしたという物語の構成を語るのではなくて、この義仲が願書を提出した

という八幡宮の、そもそも源氏とのかかわりを語る話である。すなわち八幡宮から源義家を想起し、その義家の十二年にわたる戦闘の苦難と、更に七騎落ちの型を踏まえ、倶梨迦羅明王をからませて構成するものである。

第十二条の「天武天王焼栗事」も、時忠が語る木曽宮のことから天武天皇の往時を想起し、これは他の『平家』諸本に見えないことであるが、田原の小家の主が献じた栗の奇瑞談を核として天武天皇の苦難を語るものである。

下巻第十五条の「神璽宝劔内侍所事」は、特に神璽に話をしぼっている。すなわち八坂玉がアマノサクメに奪われ、これが秦耆大王の手中に入る。鬼王の出す難題に苦しめられる玄弈三蔵が、蟻通明神の神助によりこの玉をえたこと、蟻通明神がこの玉を宝にすることを語るものと、鬼王のくり出す難問を切りぬける話は、アマノサクメ（天邪鬼）の登場とともに民話の型を踏まえて神璽談を再構成したものと見るべきである。

4

以上を通して、『族伝抄』におさめる話は確かに『平家』諸本に源を発すると見られるが、いずれもその原典を再構成したものと言える。この種の再構成は『源平盛衰記』にも見られるもので、『平家物語』を核としながら、そこに更に語り手の判断を以てするものである。ともあれ本書におさめる個々の話は、四部本にそぐわない。

八

彰考館に『平家物語劔巻』が蔵される。その内容は、多田満仲が賜姓源氏となった時に筑紫鍛治をして作らせた髭切と膝丸の二劔があり、これが義家、為義らを経て頼朝、義経へ、最後は新田と足利に相伝された経過を語るものであるが、その中に『平家物語』の梗概とも言うべき話をおさめている。更に、物語において秘曲とされる宝劔の由来についてもふれる。三種の神器の一つであるこの宝劔について語る部分を核としつつ、『平家物語』のダイジェスト版と併せて源氏相伝の名劔の由来を語り上げたものである。

なお本書の末尾には、

雖為悪筆之至極為後代見験之如形染筆早誠比興〳〵

長禄四季庚辰林鐘中十日書了　生年廿六

和か州柿本寺　右筆祐尊

とある。

本書と同じ話が屋代本の別冊としてあるが、それでは彰考館本に見られる新田、足利への相伝のことが記されていない。

ともあれ『平家物語』の中の秘曲とする「劔巻」を核とし、一種の源氏相伝劔物語を構成したものと見るべきで、おそらく室町期の物語[20]であろう。

九

彰考館に『平家奥秘』などと合綴の『壇浦合戦記』が蔵される。元

暦元年三月十九日の牟礼高松での合戦から、有国が登場してのことば合戦、那須与一の扇落し、しころびき、鞆六郎らが判官を狙って果さなかったこと、弓流し、次信最期、平家の先陣争いのため夜討の実現しなかったことを記し、

よつて元暦春のころむ知の僧見きくことく後代のためしるしおかるる所也やしまたんの浦合戦のゑんきけたしもつて如件

于時元暦元歳三月廿九日南面山沙門龍胤在判

として、更に経寿院阿闍梨祐圓、本三位中将権中納言重衡　但馬守平経政の三人の詠を置き

八十一代帝安徳天皇御宇寿永弐年十月三日牟礼六万寺之本堂に以自筆此三人被遊与置成

いたはしや君の命をつきのふのしるしの石も苔衣きて

次信返歌

おしむともよも今迄はなからへし身を捨てこそ名をは次信

抑此僧と云は奥州之住人佐藤之一門也百三代帝後小松院御宇至徳元歳四月五日に八島たんのうらに来て石塔に向て詠すれは石塔より返歌と云々

寛文九丙歳十二月日書之

と結ぶ。その話の内容は、順序、構成ともにほぼ『盛衰記』に一致するものである。ところが、これとほとんど同文で、ただ形式として真字になるものが香川県高松市の屋島寺の什物として伝わることが井川昌文氏[21]により紹介されている。ただ彰考館本では「いたはしや」の詠の作者が不明であるが、屋島寺本は、

信空ト云フ僧来リテ而読ミ侍リ

とあるので「此僧」が明確である。それに屋島寺本の原本には、

慶長十七年三月日　屋島寺

とあり、現存本は、その元和九年の転写本であることが明らかであるので、屋島寺本の方がより古い形を伝えるものらしい。元暦元年に龍胤が記したとする話は信じがたく、おそらく現地での見聞を模した形で、『盛衰記』を踏まえて合戦縁起を再構成したものと見られる。

北川忠彦氏[22]らが指摘されるように、民俗芸能語りとしての「八島合戦」とも血脈を通わすものであろう。武久堅氏[23]も、上述の作品とは異種の断簡を紹介され、東国の血縁的共同体における追善供養の唱導語りを想定されている。その実情については、なお諸種資料を踏まえた検討が必要であるが、屋島を舞台とする唱導合戦語りを成立基盤として、『盛衰記』を抜き書きするということが室町期にあったものと想像される。

本稿第六節で言及した『平家秘巻　高野巻』も、やはり高野を舞台とした『平家物語』の一つの受容のあり方を示すものであろう。

十

上述して来たように、『平家物語』にあっては、物語自体が多様に変容をとげて行った。それに種々の状況を背景に、きわめて固定的な、秘曲としての抜書から、むしろ土俗的、宗教的な背景のもと、更には

各説話内部において、自己増殖的とも言うべき再構成をも行うことのあったことが、見て来たような抜書から想定できるのである。個々の抜書については、更に詳細な検討が必要であるが、ともあれ、このような物語の受容のあり方をも、広義の『平家物語』生成史の一問題としてとらえることが可能であろう。改めて『平家物語』のひろがりの広さを思い知らされることである。

注

(1) 小西甚一氏「平家物語の原態と過渡形態——第一部・本文批判の基本的態度——」(『東京教育大学文学部紀要』32　昭44・三) の命名による。

(2) 山下『平家物語研究序説』(昭47・三) では八坂流について五分類を行った。一方流については、高橋貞一氏『平家物語諸本の研究』(昭18・八) の三分類説が現在のところ穏当と思われる。

(3) 例えば市古貞次氏編『平家物語研究事典』(昭53・三) の関連項目。

(4) 注(2) の著。

(5) 藤井隆氏「戦記物語の古筆印について」(『名古屋市立大学教養部紀要』15　昭40・三) など。

(6) 笠栄治氏「厳島神社蔵平家物語断簡をめぐって」(『糸高文林』5　昭32・二)

(7) 松平文庫本の外に山岸徳平氏蔵本があるが、おそらく同書であろうと言う。

(8) 高橋貞一氏の論は、その論題「四部合戦状本と平家打聞」(『仏教大学人文学論集』第四号　昭45・九) が示すように、本書を四部本の裏書とすることから、四部本の成立を元亨三、四年頃とするところに主題がある。

(9) 高橋伸幸氏「「四部合戦状本平家物語」の「裏書」—「刀後聞」と「平家族伝抄」—」(『日本文学論究』29　昭45・一一)。

(10) 春田宣氏『中世説話文学論序説』(昭54・四)

(11) 平松家本などの諸本の位置について渥美かをる氏『平家物語の基礎的研究』(昭37・三) は、屋代本から覚一本への過程にある本文とされたが、山下 (注2の著) は、覚一本以後の混態本と見ている。

(12) 山下『平家物語研究序説』(昭47・三)、麻原美子氏「平家物語と高野聖——説話と管理圏を問題として—」(『軍記物とその周辺』昭44・三) など。

(13) 注(9) の論文。

(14) 『四部合戦状本　平家物語　別冊』(昭42・三)、高橋貞一氏「平家族伝抄の義王義女事」(『仏教文学』5　昭56・三) が同じく室町時代の性格であることを論じている。

(15) 昭和四十一年十一月の中世文学会の口頭発表「平家物語の一新資料」

(16) 武久堅氏「読み本系諸本の成立と展開」(『講座日本文学　平家物語上』昭53・三) らの命名による。

(17) 弓削繁氏の教示によれば『六代勝事記』に「重衡の後室金銅を大仏にあひくはへてゐるときに、其あかゞねわかずして御身に和せずといへり」とある。

(18) 覚一本『平家』と異なるこの人間像の意味については「平家物語論のために——物語と人物像——」(『日本文学』昭56・九) でふれた。

(19) この義王像については山下「建礼門院と祇王——その女性たちの運命——」(『図説日本の古典　平家物語』昭54・十二) にて物語としての分析を試みた。

(20) 市古貞次氏『中世小説の研究』(昭30・十二) がこの見方をしておられる。

(21) 「屋島寺蔵　屋島壇浦合戦縁起」(『言語と文芸』85　昭52・十二)

(22) 北川忠彦氏「八嶋合戦の語りべ」(『論集　日本文学・日本語　3　中世』昭53・六)

(23) 「合戦譚伝承の一系譜——『屋島軍』の場合——」(『広島女学院大学　国語国文学誌』6　昭51・十二)